

週 報

1996年3月24日 復活前第2主日

巻16 52号

1995年度教会主題

「恵みに生きる」

聖句 すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。

コリントの信徒への手紙 二 12章9節a

- 目標
1. 生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
 2. 一人一人が伝道と奉仕を。

日本キリスト教団 横浜港南台教会

〒234 横浜市港南区港南台 7丁目-8-29

電 話 045-833-5323

ファックス 045-833-6616

振 替 00290-4-13994

牧 師 秋 吉 隆 雄

苦難から解放された出エジプトの経験が彼らの律法の根底を形成している。

更に「父は子のゆえに死に定められず、子は父のゆえに死に定められない」と罪は家族に関係のない個人的な責任としてとらえられている。犯罪者の家族を追いかける現代のマスコミを恥じ入らせる鋭い人権意識に立っている。苦難を味わった民族の優しさ、神信仰がもたらす個人尊重の新しさに感嘆する。ところが、長子を特別視し、家名を守るための家族制を頑強に守ろうとしている。それが伝統を継承する力になったことは確かだが、その裏側で、女性の生き方は厳しく規制され、男性の「所有物」のように扱われている。この人権意識のアンバランスが何とも不釣り合いである。

弱者を保障する人権尊重の理念は、近代人が獲得した人間の英知であり誰もが当然としている。しかし現実には、強者による差別と序列化の構造は変わっていない。残念ながら、旧約聖書時代を批判できるほど、21世紀を迎える私たちは新しくなっていない。

一牧師室から一

旧約を読む会は「申命記」を読んでいる。紀元前7世紀、神殿改修の際、発見された律法に感激したヨシュア王は、その律法に基いて、蔓延していた異教の神々を排除し、唯一神教が持つ清新な倫理に立つ宗教改革を断行した。その律法が申命記と言われている。

彼らの律法は社会的に弱い立場の人々を守ろうとしている。質草に生活必需品である挽き臼を取ってはならない、寝る時の布団になる上着は夜には返しなさい。賃金は搾取せず、日没前に支払いなさい。穀物や果実の収穫時、全てを取らず貧しい人々のために残しておきなさい。正しい秤と升を用い、公正な裁判をしなさい。これらの律法は寄留者、孤児、寡婦の生きる権利を保障しようとしている。それは、自分たちもかつては「エジプトの国で奴隷であった」からだと繰り返し語っている。奴隷の